慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一九五八年の南寧会議と三峡ダム計画
Sub Title	The 1958 Nanning conference and the Three Gorges dam project
Author	林, 秀光(Lin, Xiuguang)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2017
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.90, No.7 (2017. 7) ,p.1- 28
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20170728-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九五八年の南寧会議と三峡ダム計画

林　秀光

はじめに
第一節　転換点としての南寧会議
1　最高指導層における異議の表面化
2　李鋭と林一山の南寧入り
3　三峡ダムに関する二つの争点
①　建設費の問題
②　安全保障問題の初登場
第二節　推進派のうけたダメージ
第三節　成都会議における「三峡ダムガイドライン」の制定
1　三峡地域の実地調査と意見表出
2　三峡ダム計画についての合意形成
第四節　成都会議後の動き
1　「三峡科技研究会議」における王任重の反発
2　他のアクターの反応
3　毛沢東の反応
おわりに

はじめに

三峡ダム計画は一九五四年の長江大洪水を契機に、ソ連人専門家の招聘を経て国家プロジェクトとしてスター

トした。五七年一二月には、周恩来が三峡ダムの実現を託した題辞をものしている。[1] しかし、翌年早々に開かれた二つの中国共産党中央政治局会議において、その着工の決定は見送られた。

五八年一月に、広西チワン族自治区南寧市において開かれた政治局拡大会議（通称「南寧会議」）は、急進的な経済政策を展開する「大躍進運動」を決定したことにより、政治史に名を残す会議となった。じつはこの会議では毛沢東が三峡ダム計画について言及したため、急きょ会期を延長して、推進派の林一山と慎重派の李鋭を招集し討議が行われた。また、約二か月後に開かれた成都会議（前半は中央工作会議、後半は中央政治局会議）でも三峡ダム計画に関する決議（「中共中央関於三峡枢紐和長江流域規劃的意見」）が採択されたが、着工の決定に至らなかった。「大躍進運動」のさなかという時局も手伝い、この決議に対しては「促進」ではなく「促退」だとして、三峡ダム推進派から不満が噴出している。[2]

「大躍進運動」の時代にありながら、なぜ三峡ダム計画は着工されずに停滞を迎えることになったのか、というのが本稿の問題関心である。

先行研究は、この二つの会議に参加した李鋭が八〇年代に発表した著述に基づき、三峡ダム計画をめぐる攻防の一端を明らかにした。[3] しかし、この二つの会議で議論された具体的な課題や得られた合意、その後の政策過程への影響についての検討が十分になされたとは言いがたい。本稿では、近年新たに刊行された資料を利用し、三峡ダム計画がこの時代に停滞した要因を探る。

第一節　転換点としての南寧会議

1　最高指導層における異議の表面化

南寧会議の開催は、周恩来の提案によるものであったが、毛沢東が同意し自ら会議通知と出席者リストを作成した。[4] 毛沢東の当初の計画では、会期は一九五八年一月一一日から二〇日までとなっていたが、李鋭と林一山を招集し三峡ダムについて報告させるため、二三日まで延長された。[5]

南寧会議における当初の議題は、第一期全人大第五回会議の開催にあたっての予算や五か年計画などであった。しかし、毛沢東は周恩来、薄一波らの国務院指導者に対し、その慎重な経済運営を「反冒進」であるとして強く非難した。[6]

毛沢東は上海市党委員会書記柯慶施の行った「乗風破浪、加速建設社会主義的新上海」報告を褒め称え、出席者の前で、「恩来同志、君は総理だが、見たまえ、こんな文章が書けるか」と面詰した。周恩来が「書けません」と答えると、「君は『反冒進』と言えまいか。わたしは反『反冒進』なのだ」と詰め寄った。毛沢東の非難に対して、出席した副総理たちは戦々恐々としていた。「ほとんど毎晩、（李）先念、（薄）一波などが総理の部屋に集まり、いかに自己批判するか夜中の二、三時まで議論していた」と緊迫した会議の様子を周恩来の秘書が回顧している。[7]

引き続き、一七日にも毛沢東は「反冒進」について周恩来を非難した。[8] 予想を超えたその非難をうけて、周恩来は一九日の会議で自己批判を余儀なくされた。[9] このときの毛沢東は、「困難をものともせず前進する勢いを持った、抗日戦争期にみられる興奮した精神状態に似ていた」と評される。[10]

まさにこのような状況のなかで、毛沢東が三峡ダムに言及し討論を求めたと言われている。[11] それをうけて、薄一波は反対者の存在、水利と水電部門間の軋轢について報告した。[12] 南寧会議において、薄一波も毛沢東の批判をうけた一人であったが、彼はそれでも反対者の存在を明らかにした。そこには、薄一波、李富春ら経済や財政を主管する副総理たちの三峡ダムに対する根強い反対姿勢がうかがえよう。

2　李鋭と林一山の南寧入り

南寧入りについて、李鋭が中央弁公庁からの電話で招集をうけたのは一月一七日であった。翌日、彼を乗せた専用機が武漢に立ち寄り、林一山とその秘書魏廷琤が合流し南寧に向かった。[13]

一方、林一山は李鋭と異なる回想をしている。林一山は南寧会議における自らの置かれた状況については多くを語らないが、李鋭より先に南寧入りしたことを強調する。いわく、「南寧会議では三峡ダムが議題だったので、会議が始まる前に、秘書張行彬を連れて毛沢東の遣わした専用機で南寧入りした」。[14] または、「私が着いてから（毛）主席に反対者のいることを告げる者がいた。それは李鋭という人であった。毛沢東は反対意見に関心を持ったので、また飛行機を遣わせて彼を連れてきた」といった具合である。[15]

しかし、南寧会議への出席者名簿は毛沢東が事前に作成しており、そのリストには林一山の名前はなかった。[16] 加えて、南寧会議は予定より会期を延長し、三峡ダムについて討議する運びになったことを鑑みても、林一山だけが事前に南寧に招集されることは考えにくい。また、林一山の部下である長江流域規劃弁公室（以下、長弁）宣伝部の成授台らも、「南寧会議の最終段階に、毛沢東が正式に三峡ダムを政治局会議の議題に挙げた」と認めている。[17] したがって、会議に居合わせた毛沢東の秘書田家英が李鋭の到着直後に語ったように、毛沢東が薄一波の発言をうけて李鋭と林一山を急きょ招集したというのが妥当であろう。[18]

二人の到着した夜に、早速林一山が約二時間、李鋭が約三〇分の報告を行った。毛沢東らは時折二人の報告に割り込んでコメントしたが、最後に二人に報告書の提出を指示した。林一山が約二万字の『関於長江流域規劃的初歩意見』、李鋭が約八千字の『大力発展水電以保証電力工業一五年赶上英国和修建三峡水電站的問題』（以下、『大力発展水電和修建三峡水電站的問題』）をそれぞれ提出した。三日後の二二日夜に、二人は再び会議で報告した。[19]

表１：李鋭と林一山の対面（1958年まで）

期日	場所	要件
1952年6月6日～12日	武漢市	李鋭が湖南省委宣伝部長として荆江工程を視察した際に、林一山の説明をうけた
1952年12月28日	武漢市にある長江水利委員会	李鋭が燃料工業部水電工程局長として情報収集のために林一山を訪問
1954年10月	丹江口ダム予定地	丹江口ダム予定地の視察、建設の可能性について議論
1956年2月	三峡ダム予定地	ソ連人専門家とともに三峡ダム予定地の視察、建設の是非について議論
1958年1月18日、22日	南寧会議	毛沢東らの前で三峡ダム建設の是非について論戦
1958年2月26日～翌月6日	武漢市から重慶市までの船上、三峡ダム予定地	周恩来らとともに三峡ダム予定地の視察、議論

出典：『李鋭往事雑憶』260～261、276頁、江蘇人民出版社、1995年。李南央編『李鋭日記（1946～55年）』363、419頁、渓流出版社、2008年。

〈表１：李鋭と林一山の対面〉で示したように、李鋭と林一山は、この会議までにすでに四回も顔を合わせており、激しい議論を交わしてきた相手でもあった。[20] ある意味で二人は、それまで戦わせてきた争点を最高指導層の前で再確認した形になるが、この会議ではとりわけ二つの問題が新たに注目された。

３　三峡ダムに関する二つの争点

①　建設費の問題

林一山は、「中央の三峡ダム建設の意図は非常に明確であった。というのも、この会議では建設費の討論に多くの時間を費やし、削減の要請もあったからだ」と回顧している。[21] その値引き交渉のプロセスは以下の通りである。

林一山は三峡ダムの建設費を七二億人民元と報告したが、それに対して周恩来は「発電機を減らせば五〇億で足りるか」と質問した。林一山が「足りる」と答えると、薄一波は「二五億ではどうか」と畳み掛けたが、それに対しては頑として不足を主張した。実は建

設費の問題について、林一山は「建設費については、数回にわたって書簡や面会を通して報告しており、毛主席は算出過程をご承知のはずだが、主席は『中央が決定したあとに予算が足りなくなったと言い出しはしないか』と不安を口になさった」と認めている。(22)

毛沢東の懸念には理由があった。第一に、「釣魚工程」と揶揄される官僚部門や地方政府の常套手段である。「釣魚工程」とは、官僚部門や地方政府がプロジェクトの承認を得るため、あえて低めの予算で申請し、許可されてから再度高めの予算を組みなおすというものである。最高指導層には、三峡ダムもまた「釣魚工程」に陥る不安が存在したものと思われる。第二に、その不安には根拠があった。じつはこの時点で、林一山が提示する数字はかなりあやふやなものであった。林一山自身が七二億人民元に辿りつくまでの算出過程を、次のように明らかにしている。(23)

彼は、五三年に長江を下る「長江艦」上で毛沢東に、四〇年代に米国人ジョン・サーベジの試算した建設費は一三億米ドルで、人民元に換算すると七八億になると説明した。その際、毛沢東は自分の裁量できる主席基金は毎年七～八億人民元で、三峡ダムの建設費を一〇数年の建設工期で割れば、主席基金のみでもカバーできると発言した。

しかしその後、ソ連人専門家は建設費が二〇〇億人民元を超えると推計した。それに対して、長弁の技術者楊賢溢は一〇〇億人民元があれば十分であるとの見解を示した。林一山は両者の数字の合理性を判断できず、折衷案として一六〇億人民元と報告した。その報告を見た毛沢東は王任重に、こんなに金がかかるようでは完成はいつになるだろうと漏らしている。

のちに、ソ連人専門家が中国人技術者の意見を組み入れ再計算すると、以前より低い数字が出た。それをうけて、林一山は再び毛沢東に対して三峡ダムの建設費が一〇〇億から一二〇億人民元であると報告し、その後また

九〇億人民元にして報告した。南寧会議直前、林一山は長弁の技術者らに建設費を抑えられるか再計算させたが、結果は七二億人民元であり、図らずもジョン・サーベジの試算とほぼ同じになった。

このような算出過程を鑑みるに、林一山の提案した三峡ダム建設費は十分に検証された科学的なものとは言いがたい。また、「長委会の責任者」（林一山を指すと思われる――筆者）が五七年一一月、つまり南寧会議の二か月前に、副総理李富春に対して、三峡ダム投資額の見積りは四九億人民元と報告していた。[24] これも明らかに低い数字を報告したものであった。李富春が南寧会議でこの矛盾をいかに追及したかは不明であるが、彼もまた不信感を抱いたことは容易に想像できよう。したがって、たとえ林一山が振り返るように、中央に建設の意図があったとしても、このような算出をもとに予算を組むわけにはいかなかったであろう。

② 安全保障問題の初登場

林一山がはじめて三峡ダム計画を公にした五六年の段階で、言及した問題点は以下の通りである。すなわち、第一に、水量の多さによる、水流コントロールや堰き止め工事の困難。第二に、大規模かつ長期の工程が要する莫大な資金投入と回収の長期化。第三に、中国内地における最大の交通動脈たる、長江主流を切断することによる物流への影響。第四に、国民経済の需要を超えた発電量。このように、そこに三峡ダムの安全保障問題はなかった。[25]

また、長弁によって五九年七月に発表された『長江流域綜合利用規劃要点報告総論』は、林一山が南寧会議で提出した『関於長江流域規劃的初歩意見』を原案としているが、そこでも、「ダムの安全保障にかかわる投資はその異なる基準によって別途計算する必要がある」と述べるにとどまっている。[26]

林一山がはじめてダムの安全保障問題に言及するのは六六年三月九日の「中央、主席」宛の手紙中であり、

「三峡ダムのようなプロジェクトは疑いなく敵が破壊する標的になる」と認めたうえで、その対策を述べている。[27]

同時に、李鋭も三峡ダムの安全保障問題について言及するのは南寧会議が初と思われる。李鋭がこの問題を明文化したのは、二二日夜の会議に提出した報告書『大力発展水電和修建三峡水電站的問題』のなかであり、三峡ダム建設の問題点七つのうち、四番目に三峡ダムと安全保障の関係を挙げている。

「第四に、三峡ダムと安全保障の関係がある。（毛）主席は談話のなかで明確にこの点について指摘した。三峡ダムのようなプロジェクトは当然敵の注意を引く。もし破壊されれば、中国経済の大部分に打撃を与えるだけでなく、より深刻なことには、（長江）下流幾千万人民の生命にかかわる問題になる。この点から考慮しても、三峡ダムの建設時期は世界情勢と一定の関係をもつ」。[28]

この報告書は南寧会議に提出されたが、その宛名は「主席」となっている。さらには文末に「主席のご参考まで」とあり、毛沢東の目に入れる前提の文章に当人の発言を偽って記すとは考えにくい。ここから、毛沢東が南寧会議で三峡ダムと安全保障の問題を「明確に指摘」したことは事実であるといえる。

では、毛沢東の発言はいかなる状況でなされたか。

前述したように、南寧会議では、一月一八日と二二日の二回にわけて三峡ダム計画を討議したが、一月一八日は林一山と李鋭がそれぞれの主張を述べたのに対し、二二日には二人の報告書をもとに再度議論が行われた。[29]

じつは、この二日間の会議中に毛沢東が行った三峡ダム安全保障問題に関する発言については、資料の制限上、李鋭の回顧を参照するほかない。

一月一八日、李鋭が「（三峡ダムの）安全保障も問題であり、建設時期は世界情勢を考える必要がある」と発言した。それをうけて、毛沢東は「三峡ダムのようなプロジェクトは当然敵の注意を引く。決して破壊されてはならない」と言葉を挟んだ。同時に、フロアから「下流の幾千万の人命がかかわる問題だ」と指摘する声が上がっ

た。[30]

上述の李鋭による報告書はこのやり取りについて発言者を伏せた形で再現したように思われる。また、上述したように、林一山が「中央、主席」宛の手紙で「三峡ダムのようなプロジェクトは疑いなく敵が破壊する標的になる」という言葉を用いているが、毛沢東の発言を林一山が意識して引用したとも考えられる。

そして、二二日に毛沢東は総括を行ったが、三峡ダムの安全保障問題について、「原子爆弾の問題もある。一極集中はよくない。やはりほかの発電所もあった方がいい」と発言した。[31]

このように、李鋭の発言に呼応した形ではあるが、三峡ダムの安全保障問題に毛沢東が南寧会議中、二回も懸念を示したことは明らかである。

李鋭は会議の流れで、三峡ダムの安全保障問題についてはじめて言及したが、それが三峡ダムの政策過程に大きな影響を与えることになった。南寧会議では上述の議論にとどまったが、同年八月から九月にかけて台湾海峡危機が起こると、会議で議論された三峡ダムの安全保障問題が現実味を帯びてきた。別稿で詳述するように、人民解放軍総参謀部が関与する形で、ダムの安全確保のため推進派のダムサイト案は再検討を迫られ、三峡ダム計画自体が停滞の様相を呈した。

別稿で詳述するように、毛沢東は存命中に繰り返し安全保障問題を理由に推進派からの建設要求を却下していた。林一山自身も認めているように、「三峡ダム建設についての異なる意見が、例えば、朱徳、陳雲など中央政治局の何人かの常務委員に影響を与えた。ある同志が朱徳に、米国が三峡ダムを決壊させた場合、上海は水没すると報告した」。[32] ある意味で、南寧会議での議論を契機に最高指導層では、三峡ダムの安全保障問題について一定の共通した見解がもたれたと考えられる。

第二節　推進派のうけたダメージ

南寧会議で表面化した三峡ダムの建設費と安全保障の問題は、最高指導層の真剣な考慮を要する課題であった。これは共産党人の「革命」的な情熱では克服できず、ガバナンスの能力が問われる問題であった。それゆえ、この二つの問題について、最高指導層の不安感を払拭できなかったことは、推進派にとって大きなダメージとなったであろう。

同時に別稿で詳述したように、推進派は三峡ダム計画が中央の既定方針であると公言したことで、李鋭らから強い反発をうけていた。[33] しかし、南寧会議で毛沢東は、「中央は三峡ダム建設の決定をしていないが、私は三峡ダムに興味を持っている」と述べるにとどまった。[34] このように、毛沢東自身が三峡ダム計画に関する立場を明らかにしたことも、推進派には不利に作用したと思われる。

一月二二日の会議で、毛沢東は周恩来に長江および三峡ダム計画の事業を託し、「年に四回かかわるように」と指示した。[35] 三峡ダム計画が周恩来に委ねられたことは、計画が毛沢東と林一山の間の個人的なつながりで進められた従来の手法から、周恩来の率いる国務院という組織系統に移ることを意味する。

また、南寧会議で問題視された水利と水電部門との軋轢を解消するために、会議直後の二月一六日に水利部と電力工業部は水利電力部（以下、水電部）に合併された。同時に、水電総局は水利部の工程局と合併し、水利水電建設総局になった。これによって、水利部門は河川開発において独自の政策をとることが難しくなったといえよう。

以上のことに加え、李鋭が林一山について次のことを回顧している。

林一山は、「誠実に、嘘偽りを交えず述べるように。中央（毛沢東――筆者）の前で扇動的な話をしてはいけな

い」と薄一波と胡喬木に叱責をうけた。また翌日にも、食事のときに林一山は再び胡喬木になじられた。[36]

じつは、林一山が一九一〇年生まれであるのに対して、李鋭は七歳年下で、薄一波は二歳年上の一九〇八年生まれ、胡喬木が二歳年下の一九一二年生まれと、四人は年齢が近かった。むろん、党内または政府内の職位では、胡喬木（中共中央委員、中央書記処候補書記）も薄一波（副総理）も林一山を上回っている。しかし、林一山は遼南省党委書記を務めた経験があり、のちに長江流域を管轄する組織では一国一城の主として部下からの尊敬を一身に集めていた。

中共党内のヒエラルキーをのぞかせる一場面であったが、南寧会議では推進派への風当たりがそれだけ強いものであったとも推測される。

加えて毛沢東は李鋭の才能を認め、「わが党内には、まさにこのような秀才が必要だ」として彼を自分の秘書にした。[37] これもまた林一山にとってみれば、論争相手に軍配が上がったのも同然といえよう。それ以上に、毛沢東の秘書という身分を得た李鋭は成都会議に参加し、三峡ダムに関する決議の作成に自らの意見を盛り込むことができた。

「これで推進派はもう騒げなくなったと思った」との李鋭の回顧からも、南寧会議における林一山の狼狽ぶりがうかがえよう。[38]

第三節　成都会議における「三峡ダムガイドライン」の制定

1　三峡地域の実地調査と意見表出

南寧会議で三峡ダム計画の主管を任せられた周恩来は、一九五八年二月二六日から翌月六日まで、武漢から重

慶まで船で移動し三峡地域の実地調査を主宰した。[39]

周恩来のほかに、副総理李富春と李先念、合併したばかりの水電部の水利と電力両方の部長李葆華、劉瀾波と副部長張含英、銭正英が参加した。中央部門は、中国科学院副院長兼党組書記張勁夫と国家技術委員会の劉西堯が派遣されたが、交通部、地質部と第一機械工業部（以下、一機部）の関係者も参加した。地方政府の参加者には、四川省委書記閻紅彦、湖北省委書記王任重などがいた。そしてソ連人専門家をはじめ、関係部門の技術者とともに、水力発電部門からは李鋭、李善民、陸欽侃と程学敏、水利部門からは林一山と李鎮南らが参加した。[40]

総勢一〇〇人前後の一行が、現場の視察と船上での論争を繰り返した。李鋭は四〇歳という若さによってなんとか持ちこたえたとのことで、議論が白熱化した様子がうかがえる。[41]

李鋭と林一山は従来の論点を重ねて言明した。[42]さらに、ソ連人専門家が、三峡ダムは莫大な投資額に加え、発電量が経済規模の必要とする電力を超えているため、まずは長江の支流を検討すべきであるとする慎重な意見を述べた。[43]それには、李鋭や陸欽侃らが同調した。

ここで注目したいのは、地方政府と部長クラスの意見である。

閻紅彦は視察中に周恩来から考えを問われ、「大局に従う。しかし、水位は洪水対策のために設定されるべきものであり、発電のために高めることがないよう希望する」と答えた。[44]

一方、王任重は約一〇分間ものスピーチを行い、三峡ダムの長江中流における洪水防除や、国家建設への絶大な影響などを指摘した。彼は南寧会議では発言していないが、ここで林一山を弁護する発言をしている。[45]いわく、「彼は仕事に強い責任感をもっている。その問題提起は調査と研究を経て行われたものであり、根拠に基づいている。決していい加減なことを言っているのではない」。[46]また、この視察に際して林一山に助言したことを明らかにした。「この度の会議は三峡ダムが議題なので、ほかのことを多く語ると重点が目立たなくなる。私は彼と

相談し、三峡ダムそのものに特化して書くことにした。このため、彼の報告では長江の中流と下流、主流と支流、または中型と小型プロジェクトの関係についてあまり言及していない」[47]。王任重のこうした言説からは、推進派間の連携関係をみてとれよう。

前述したように水利部と電力工業部が合併されたが、その部長の李葆華と劉瀾波は「三峡ダムの推進派になる」と宣言したが、それぞれにニュアンスの異なる発言をした[48]。

水利部副部長であった李葆華は、過去二年間にわたって水利と水電両部門が論争した結果、「現在では双方ともバランスがとれてきた」と評価する一方で、三峡ダムの完成に二〇年間もかけるのは長すぎるとして、「たとえ三峡ダムは英国を追い越すのに間に合わないとしても、将来米国を追い越すのに使えるだろう」と発言した。これは、李鋭の「目下英国を追い越すのに、三峡ダムは間に合わない」との発言への反論であったと思われる。李葆華は「大躍進運動」に呼応する形で水利部門の立場を表明したといえよう。

一方、電力工業部長であった劉瀾波は、従来の論争を認めたうえで、「三峡ダム建設の着手は、重要な技術問題が解決された後にされるべきである」と慎重な考えを示した。

またこの場で、その活躍を抜きにして三峡ダムの歴史を語ることのできない人物が、はじめて登場した。元水利部副部長銭正英である。彼女は八〇年代以降、三峡ダムの推進に多大な影響力をもつようになったが、「五〇年代、六〇年代には三峡ダムに反対であった」としている[49]。しかし、五八年の時点でなされた彼女の発言は反対とは見なしがたい。

銭正英が李鋭のあとに長い発言を行ったが、その主旨は三峡ダムを強く支持するものであった。「三峡ダムは長江総合開発ビジョンにおけるカギであり、中心であることをまず肯定しなければならない」、「三峡ダムを肯定しなければ、主流と支流の関係を正確に定めることが困難である」、「長江洪水問題の抜本的な解決には三峡ダム

を措いてない」。

2　三峡ダム計画についての合意形成

現地視察直後の三月九日から二六日まで、成都会議が開かれた。三月二三日に周恩来による三峡ダムと長江流域総合開発ビジョンに関する報告が行われ、二五日に「中共中央関於三峡枢紐和長江流域規劃的意見」（以下、「三峡ダムガイドライン」）が採択された[50]。現地調査の最終日三月六日に重慶において周恩来の主宰で「総結紀要」がまとめられ、「三峡ダムガイドライン」は主としてその内容をもとに作成された[51]。

同時に、周恩来は毛沢東や朱徳の意向をも組み入れている。たとえば、「三峡ダムガイドライン」第一項目の書き出しである「国家の長期的経済発展と技術条件という二つの面から考慮すると、三峡ダムの建設が必要であり、かつ建設する能力も備えている」という文言のあとに、毛沢東が「しかし、最終的な建設の決定および着工時期については、重要なかかわりをもつ各方面の準備作業が大まかに完成してはじめて決心を固めることができる」と付け加えて修正している[52]。

また、周恩来が現地視察に向かう前に、朱徳は「三峡ダムの貯水位は早いうちに決定するのがよい。というのも、決定しないと工業の配置が困難になる。重慶の工業建設は三峡ダムの貯水位が決定されてはじめて合理的な配置ができる」との意見を述べている[53]。周恩来は重慶での総括会議でその意見を伝えた。実際に「三峡ダムガイドライン」では、「三峡ダムの正常貯水位は二〇〇メートルに抑え、それを超えてはならない。同時に、一九〇と一九五メートル案についても資料とフィージビリティ報告書を提出すること」と定められた。

これは三峡ダムの技術的な問題に関する唯一の記述であるが、四川省、とりわけ重慶市の水没軽減を担保するものであるといえよう。推進派も認めているように、「正常貯水位を決定するカギとなる要素は水没、とりわけ

水没による重慶市への影響である」[54]。別稿で詳述するように、三峡ダムの政策形成過程には重慶を重視するある種の合意が一貫して存在した。

「三峡ダムガイドライン」は三峡ダム計画についてきわめてバランスのとれた表現をしている。ひとつは、前述した第一項目であるが、三峡ダム建設の可能性を認めつつ、決定は機が熟したのちとしたこと。これは、毛沢東の意向であったことは注目に値する。いまひとつは、「三峡ダムは長江の総合開発ビジョンの中心であるが、それだけに集中しその他を顧みず、三峡ダムをもってすべてに取って代える考え方を防止しなければならない」と、三峡ダムの重要性を認めつつ慢心を戒めた点である。

周恩来は南寧会議で自己批判を余儀なくされたばかりであった。そのため、彼は「三峡ダム計画の促進派にならざるを得なかったが、彼はこの世界的にも前例のない巨大プロジェクトに対し、きわめて慎重に対応し実事求是の方針をとった」と李鋭が評した[55]。このように、「三峡ダムガイドライン」は、最高指導層の意向をはじめ、現地視察で表出した多様な意見を組み入れたことによって、急進の時代にありながら賛成派と慎重派の両方がうけ入れられる合意としてまとめられた。

繰りかえしになるが、毛沢東が三峡ダム着工の決心は各種の準備作業が大まかに完成したのちに固める、と修正意見を提示したことはそれ以上に重要であるといえよう。

第四節　成都会議後の動き

1　「三峡科技研究会議」における王任重の反発

後年、林一山は「三峡ダムガイドライン」を契機に三峡ダム計画が新しい段階に入ったと評価している[56]。林一

山の当時の思いは知る由もないが、彼が南寧会議や成都会議について多くを語らないことからは穏やかならざる心中が推測されよう。一方で、王任重は当時公の場で強い反発を示した。

成都会議をうけて、同年四月に張勁夫が率いる「三峡科技領導小組」が成立した。じつは李鎮南の回顧によれば、周恩来が前述の実地調査中に張勁夫に対して、三峡ダムに関する科学技術研究の統率を指示した[57]。当時、長弁は「技術人員が三千人を超え、工程師四〇〇～五〇〇人を有するもっとも強力な研究機構であり、その多くは三峡ダムの研究に従事している」状況にあったが、周恩来が現場をみて、三峡ダムをめぐる技術問題の重大さに懸念を抱いたことがあるとうかがえよう[58]。

つづいて、「三峡科技領導小組」の主宰による長江三峡水利枢紐科学技術研究会議（以下、三峡科技研究会議）が六月五日から一六日まで武漢で開かれた。この会議の開催は、三峡ダムに関する研究の主導権が林一山の率いる長弁から「三峡科技領導小組」に移行したことを意味するものであった。

王任重は初日に、各部門から出席した約三〇〇人もの聴衆を前に、主に以下の三点についてスピーチした[59]。

第一に、「わたしは湖北省で仕事をしているので、湖北人民の利益から三峡ダムを造ることに積極的である。全国においても、この件に関してわたしは積極的である」と自らの立場を明らかにした。

第二に、「三峡ダムの測量調査、設計と施工の期間は約一五年から二〇年を要すると思われる」との「三峡ダムガイドライン」で定められた工事期間の短縮を求めた。

王任重は、「大躍進運動」のスローガンである「多く、速く、立派に、むだなく」について、自分がもっとも興味を持っているのは「速く」であるとしたうえで、「第一歩として、五年前倒しができないだろうか。つまり、一〇年から一五年で完成させる。それは可能だろうか？　科学技術はなんのために存在するのか？　もし結果的に五〇年もかかるなら、この会議を開く必要はなかったし、わたしもとっくにやる気をなくしていた。（中略）

いかに、どの程度短縮するかは、あなたたちにかかっている」と聴衆に訴えている。

第三に、「三峡ダムガイドライン」への不満をあらわにしたうえで、重ねて三峡ダムの早期着工を求めた。「成都会議では三五の文件が起草され、そのなかの一つは三峡ダム問題に関するものである。三四個は素晴らしいが、たった一つよくないものがある。それは三峡ダムだ。なぜなら、遅すぎるのだ」。（中略）「六億人を擁する大国がいつも他国の後塵を拝するのは、みっともない。他国に花を持たせてもよい事柄もあるが、どうしても第一位を取らなくてはならないこともある。三峡ダムはいまなら世界一の規模を誇るが、一〇年、二〇年後でもそうだろうか？　必ずしもそうではない。速度を求めなければならない。まずは一〇年あるいは一五年のうちに三峡ダムを完成させることを希望する」。

それは自他ともに認める三峡ダム推進派王任重の、「大躍進運動」期にもかかわらず着工が決定されなかった悔しさがにじむスピーチであった。

じつは、「三峡ダムガイドライン」では、「洞庭湖水系のグランドデザイン（規劃）問題と両湖（湖北省と湖南省――筆者）の洪水対策問題は、可及的速やかに王任重同志が責任をもって関係各省の部門責任者を招集したうえで討議し、方案を提出すること」と定められていた。林一山は後年、「総理が王任重に両湖の調整を任せたが、利口な王任重は調整が難しいことを知っていた」と語っている[60]。この発言は、王任重が三峡ダムに積極的なのは責任回避のためだとする婉曲な指摘とも受け止められよう。

2　他のアクターの反応

とはいえ、三峡ダム計画への呼びかけには研究者が積極的に反応した。林一山は、「五八年六月の第一次三峡科学技術研究会議（「三峡科技研究会議」）において、全国数十の科学技術研究部門が、研究課題を分担し期間内

に任務を完成させると約束した」と述べている。[61]

当時北京大学の副校長として五人の同僚とともに参会した周培源は、毛沢東が前年一二月にモスクワで発表した「東風が西風を制す」（冷戦下の社会主義陣営がかならずや資本主義陣営に勝つ）という「卓越した見解」を引き合いに、旧ソ連による人工衛星の打ち上げが米国に衝撃を与えた事例を紹介した。彼は、「三峡ダム建設は、史上かつてない壮挙」であり、「中央が三峡ダム建設を決定したことは、米国帝国主義に再度衝撃を与えることであろう。なぜなら、三峡ダムの建設を決定したこと自体が、全世界の人民にわれわれの技術力が党と政府のもとで育成され、非常な速さで発展したことを表明するものだからだ」と称えたうえで、「明らかに、三峡ダムを中心とする長江流域の総合開発ビジョンそれ自体が一つの大躍進であり、その実施によって全国の生産力が向上し、工業と農業のさらなる発展を促すであろう」と述べた。[62]

じつは、周培源は八〇年代後半から三峡ダム建設反対の論陣を張るキーメンバーとして活躍したが、彼の当時の発言からは、冷戦下または「大躍進運動」のさなかにおける中国知識人の国家建設に傾ける思いが伝わる。

他方、李鋭が率いる水電部門をはじめ異なる主張をもつ組織も存在した。王任重はそのスピーチのなかで、一機部を名指しでやり玉にあげ、その非協力的な姿勢を批判している。「一機部のある同志が、一七メートルの大旋盤は造れないと言ったそうだ」としたうえで、「実のところ、大型旋盤工場（具体的な場所は不明――筆者注）は六二年には二五メートルもある世界最新式の立体旋盤を造ることができるのだ。彼らの目標は、西ドイツを追い越すことである。われわれの潜在力を充分に考慮に入れ、速さの追求には保守的な思想を克服しなければならない」と釘を刺した。[63]

3　毛沢東の反応

毛沢東は成都会議後、柯慶施、李井泉と王任重を伴って三月二九日に重慶から三峡を下り、四月一日に武漢に到着した。これが毛沢東の最初で最後の三峡下りであったが、この時期を選んだことに彼の三峡ダムへの関心の強さがうかがえよう。船上では、三〇日に四川省の涪陵と万県の地区党委員会書記、三一日には湖北省の宜昌市と沙市の責任者から聞き取りを行った。それらの地域は三峡ダム建設によって大きな影響をうけるが、入手できた資料では、毛沢東と彼らの間で三峡ダムについて会話はなされていない。

また、三峡エリアを通った際に、毛沢東は船長にそのあたりでの航行は危険かと問うた。船長は、渇水期には危険にさらされることもあるが、慣れればそれも少ない、と答え、毛沢東は、「もしわたしが船を操縦するなら、こういう険要なところが好きだ。深い淵の流れのない水がいいのか、それとも、絶えることなく滔々と流れる長江がいいのか？　わたしが思うに、やはり滔々と流れる長江がいいだろう」と述べた。そのあとに、長江にそびえたつ「神女峰」を望遠鏡でいろいろな角度から鑑賞し、「神女」にまつわる古典を引き合いに随行員にうんちくを披露した。(64)

別稿で論じたように、毛沢東が五六年六月に詠んだ詩文「高峡出平湖」や「神女應無恙」は、林一山も認めたように、三峡ダムを推進する勢いに棹さす役割を果たしたのである。(65) しかし、毛沢東が三峡下りで行った言説からは、二年前に声高に歌い上げた三峡ダムへの熱い思いは感じられなかった。また、毛沢東が「深い淵の流れのない水」より、「絶えることなく滔々と流れる長江」を好むとすれば、長江を堰き止める三峡ダムの実現を託したと解釈される「高峡出平湖」との間に齟齬が生じる。

それは、南寧会議と成都会議後の毛沢東の心境変化とも受け取れるものであったろう。こうした毛沢東の心境の変化は、彼が「三峡ダムガイドライン」に修正点として入れた上述のメッセージにも現れていた。

また、同月五日に毛沢東は、武漢でルーマニア代表団に対して、「われわれは三峡地域でダムを造る予定だ。

その準備に五年から七年かかり、完成には一五年から二〇年かかる」と紹介した。[66] これはまさに「三峡ダムガイドライン」で決定されたスケジュールであった。

おわりに

三峡ダム計画は、一九五四年の長江大洪水を契機に最高指導層の危機管理意識が高まり、ソ連人専門家の招聘を経て国家プロジェクトとしてスタートした。しかし五八年になると、順調に進んでいた計画は南寧会議と成都会議の後に停滞のきざしをみせはじめた。本稿では、「大躍進運動」のさなかにありながら、その目玉になりうる三峡ダムの着工が決定されず、のちの停滞につながる要因を南寧会議とその後の動きを通して明らかにした。

第一の要因とは、南寧会議で三峡ダムをめぐるさまざまな問題が議論され、とりわけその建設費と安全保障の問題が表面化したことによって、毛沢東をはじめ最高指導層が計画そのものを客観視せざるを得なくなったことである。

毛沢東自身がそれまでの林一山ら推進派による、三峡ダムのメリットを強調しがちな報告と異なる、建設費や安全保障をはじめとするシビアな問題提起に触れたことで、着工の即決条件は整っていないと認識を改めたものと思われる。それは毛沢東がその後も一貫して三峡ダムの安全保障問題を理由に、推進派の要求を却下していたことからもうかがえよう。

毛沢東は「大躍進運動」を決定した南寧会議で三峡ダム計画を議題に挙げ、急きょ招集した林一山と李鋭に二度の議論を行わせながら、「中央は決定していないが、自分は関心を持っている」と表明する以上の積極的態度をみせていない。そして彼は、成都会議で策定された「三峡ダムガイドライン」には、着工の決心は三峡ダムに

関する各種の準備作業が大まかに完成したのちに固めるとの修正意見を加えた。それが三峡ダムに関する一つの合意となった。

李鋭は、南寧会議で毛沢東が三峡ダムの着工決定まで求めなかったのは、自分が「小人物」であるため意見が受け入れられたのだと述べている[67]。南寧会議において、李鋭の意見が三峡ダム計画の政策決定に大きな役割を果たしたことは否めまい。三峡ダム建設は時期尚早であるとの認識は、彼の意見によって周恩来ら政治局会議出席者の間で共有されたと思われる。そして、毛沢東はこうした出席者の意向もたぶんに汲み取ったものと考えられる。

第二は、三峡ダム計画を取り巻く環境が変わり、そこにも迷走の要因が内包されていたことである。別稿では、五四年から五七年にかけて三峡ダム計画が大きく推進された背景に、水利と水電の両部門という限られた空間での攻防と、最高指導層の支持という二つの要素があったことを指摘した[68]。この時点では、三峡ダム計画は限られた両部門間の空間内で争われたにすぎず、最高指導層の支持さえ取り付けてしまえば、政策が進むという構図がイメージできよう。つまり、限られた空間のなかで、政策推進者と最高指導層の意見が一致すれば政策が動き出す。

しかし、三峡ダム計画が前進するこの二つの要件が五八年一月南寧会議を契機に少なくとも八〇年代半ばまで成立しなくなった。というのも、毛沢東をはじめ最高指導層は推進派林一山よりも慎重派李鋭の意見を受け入れ、三峡ダム計画に慎重な姿勢をみせた。「南寧会議後、三峡ダムの要所について毛沢東と中央のその他の指導者は多少なりとも理解できたことと関係している。以後、毛沢東と周恩来が逝去するまで、関係者からいかなる催促があろうとも、彼らは三峡ダムの着工を首肯しなかった」と李鋭が指摘した通りである[69]。

また、南寧会議後に実施された実地調査は一〇〇人規模であった。同時に、成都会議後に中国科学院副院長張

勁夫が率いる「三峡科技領導小組」の主宰する「三峡科技研究会議」が開かれたが、その参加者も三〇〇人を超えていた。その後は、水利と水電の両部門のほかに、多くの組織や研究者が三峡ダムの研究に関わるようになったうえ、それを指揮するのが林一山の取り仕切る長弁ではなくなったことも推進派の影響力を弱める一因になったであろう。

別稿で詳述するように同年夏ごろになると、台湾海峡危機によって南寧会議で議論されたダムの安全保障問題が現実味を帯び、解放軍総参謀部が参入した。それにより推進派の提案したダムサイトは再検討を余儀なくされ、三〇年間も迷走する事態になった。こうして三峡ダムは本格的に停滞していくのだが、そのきざしが南寧会議での議論を契機としたその後の動きに内包されていた。三峡ダムの歴史において、南寧会議は一つの転換点であったといえよう。

〈付記〉本研究は、平成二九年度慶應義塾学事振興資金の援助を受けた。ここに記して感謝の意を表したい。

（1）拙稿「一九五四年長江大洪水と三峡ダム計画」慶應義塾大学法学研究会編『法学研究』第九〇巻第二号、二〇一七年二月。

（2）「中共湖北省委第一書記王任重同志在長江三峡水利枢紐科学技術会議上的講話（一九五八年六月五日）」『人民長江』一九五八年第七期。

（3）“The Three Gorges Dam Project”, Kenneth G. Lieberthal and Michel Oksenberg: *Policy-Making in China: Leaders, Structures and Processes*, Princeton: Princeton University Press, 1988, pp.297-301.

（4）「関於召開南寧会議的通知一九五八年一月（毛沢東手稿）」。毛沢東が本通知で召集したのは、「呉冷西、周恩来、劉少奇、李富春、薄一波、黄敬、王鶴寿、李先念、陳雲、鄧小平、彭真、胡喬木、陳伯達、田家英、欧陽欽、劉仁、張徳生、李井泉、潘復生、王任重、楊尚奎、陶鋳、周小舟、史向生、劉建勛、韋国清、毛沢東」の二七人である。し

かし、陳雲、鄧小平、張徳生と潘復生が欠席し、名簿に上がっていなかった柯慶施が一月一三日に到着したことを鑑みるに、南寧会議の出席者は二四名である。出典：『周恩来伝一八九八～一九七六』下巻、一一三五～一一三六頁、中央文献出版社、二〇〇八年。また、李鋭著『「大躍進」親歴記』三〇頁（上海遠東出版社、一九九五年）は人数を二六名としており、本通知の出席者リストと一部一致しない。

(5) 同右、「関於召開南寧会議的通知一九五八年一月（毛沢東手稿）」、『周恩来伝一八九八～一九七六』下巻、一一三五～一一三六頁。

(6) 薄一波著『若干重大決策与事件的回顧』六四六、六五〇頁、中共中央党校出版社、一九九三年。

(7) 前掲、『周恩来伝一八九八～一九七六』下巻、一一三六頁。

(8) 同右、『周恩来伝一八九八～一九七六』下巻、一一三七頁。

(9) 同右、『周恩来伝一八九八～一九七六』下巻、一一三七頁。

(10) 前掲、『「大躍進」親歴記』一五頁。

(11) 盧江林、張世黎、成綬台共著『風流峡谷—中国長江三峡工程』七八頁、中国青年出版社、一九九三年。李鋭著『李鋭近作—世紀之交留言』三二六頁、中華国際出版集団有限公司出版、二〇〇三年。宋暁夢著『党内有個李鋭』一八頁、名流出版社、一九九八年。盧躍剛「長江三峡—中国的史詩」『中国作家』一九九二年第六期。

(12) 李鋭が南寧会議について論じた文献は次のとおりである。本稿は『李鋭往事雑憶』から引用する。「関於三峡問題的『御前』争論—憶毛主席親自主持的一九五八年南寧会議」『炎黄春秋』一九九二年五月号。『李鋭往事雑憶』二五一～二七四頁、江蘇人民出版社、一九九五年。『「大躍進」親歴記』一～二九頁、上海遠東出版社、一九九六年。「回憶南寧会議討論三峡問題」『湖北文史資料』八二～一〇一頁、一九九七年S1期。湖北省政協文史資料委員会、宜昌市政協学習文史委員会『三峡文史博覧』八二～一〇一頁、中国文史出版社、一九九七年。中国水力発電史料徴集編輯委員会『中国水力発電史料』（内部資料）二四～三一頁、中国水力発電学会、一九九八年。「回憶南寧会議討論三峡問題」『文史精華』一九九八年三月号。『李鋭文集』第一〇集「論三峡工程」二〇九～二三一頁、中国社会科学出版社、深圳香港社会科学教育出版社、二〇〇九年。

また、信憑性の高い関連文献に次のものがある。韓磊「関於三峡的一場『御前弁論』」『炎黄春秋』二〇〇八年第一

○期。蘆江林、張世黎、陳綬台「三峡工程的一場唇銃舌剣」『炎黄春秋』一九九三年一二月号。同右、『党内有個李鋭』四～二〇頁。

(13) 同右、『李鋭往事雑憶』二五一、二六〇頁。

(14) 林一山主編『高峡出平湖―長江三峡工程』四二頁、中国青年出版社、一九九四年。南寧会議時、魏廷琤は林一山に同行せず、丹江口ダムの実地調査をしていたと洪慶余が述べている。前掲、『風流峡谷』七七頁。林一山の回顧録も魏廷錚ではなく、張行彬を連れていたとしている。林一山著『林一山回憶録』一六八頁、方志出版社、二〇〇四年。

(15) 林一山「回顧五〇年代毛主席、周恩来対治江工作的重要指示」中国三峡総公司編『三峡工程建設年鑑二〇〇一年』三六五頁、中国三峡出版社、二〇〇二年。林一山「在南寧会上」（一九八四年二月執筆）、楊世華主編『林一山治水文選』一五頁、新華出版社、一九九二年。

(16) 出席者リストは、本稿前掲注（4）を参照されたい。

(17) 前掲、『風流峡谷』七八頁。

(18) 前掲、『李鋭往事雑憶』二六一頁。

(19) 同右、『李鋭往事雑憶』二六九頁。李鋭の報告書全文は下記書籍に所収されている。中国水力発電史料徴集編輯委員会編『中国水力発電史料選編』三二～三八頁、内部発行、水力部門の幹部と技術者の有志が刊行した『中国水力発電史料』（一九八七～九七年）の内容を選定して編輯した本冊子には出版年は明示されていないが、九八年刊行の可能性が高い。ちなみに、この報告書の初出は『中国水力発電史料』（九六年第一期）三一～三七頁にある。

また、下記書籍にも同報告書が掲載されているが、タイトルが「大力発展水電和修建三峡水電站的問題」になっている。李鋭著『論三峡工程』七八～九三頁、湖南科学技術出版社、一九八五年。または、李鋭著、薛暁源編『直言―李鋭六〇年的憂与思』一五五～一七〇頁、今日中国出版社、一九九七年。

(20) 李鋭と林一山の論争点については拙稿を参照されたい。前掲、「長江大洪水と三峡ダム計画」。

(21) 前掲、『高峡出平湖』四二頁。

(22) 同右、『高峡出平湖』四二～四三頁。

(23) 前掲、『林一山回憶録』一六九頁。

(24) 中国三峡総公司編『中国三峡建設年鑑一九九四年』二六三頁、中国三峡出版社、一九九五年。
(25) 林一山「関於長江流域規劃若干問題的商討」『中国水利』一九五六年第六期。この論文は内容の変化がみられるが、前掲、楊世華編『林一山治水文選』二五四～二八六にも掲載されている。
(26) 林一山「長江流域綜合利用規劃要点報告総論」、同右、『林一山治水文選』一六三、一八七頁。
(27) 林一山「関於長江三峡工程設計問題的報告」、同右、『林一山治水文選』三七二～三七三頁。
(28) 前掲、『中国水力発電史料選編』三七頁。
(29) 『毛沢東年譜』には、一月二二日夜、毛沢東が三峡ダム計画について会議を主宰し発言した旨の記述はない。また、一月一八日の記述では、「毛沢東は李鋭の意見を肯定し、三峡ダムプロジェクト着工の延期を決定した」とあるが、李鋭の回顧によれば、毛沢東が「中央は三峡ダムの建設決定をしていない」と発言したのは二二日であった。中共中央文献研究室編『毛沢東年譜一九四九～七六年』第三巻、二八四、二八七頁、中央文献出版社、二〇一三年。
(30) 前掲、『李鋭往事雑憶』二六八頁。
(31) 同右、『李鋭往事雑憶』二七〇頁。
(32) 傅秀堂（長江水利委員会原副主任、科学技術委員会顧問）「聴林主任口述歴史」『林一山治江思想研究会会刊』二〇一〇年第二輯。「聴林一山口述歴史」の前半部分の内容は、傅秀堂が林一山から聞いた話について時間と場所を含めて忠実に記録したものである。傅秀堂は公表にあたって自分が林一山の話を「書き直しまたは削除する権利もなくその気もない」としており、信憑性の高い資料であるといえる。この林一山の発言は「一九九一年九月一七日九時～一一時に、林主任の北京住居」でなされた。
(33) 拙稿「中国水力発電部門と三峡ダム計画」慶應義塾大学法学研究会編『法学研究』第八九巻第一二号、二〇一六年一二月。
(34) 前掲、『李鋭往事雑憶』二六九頁。
(35) 前掲、『周恩来伝一八九八～一九七六』下巻、一二四四頁。
(36) 前掲、『李鋭往事雑憶』二七一頁。同時に、毛沢東が林一山の文章について「師範学校で勉強したのに下手だ」と指摘したと李鋭が回顧している。それについて、林一山は「毛沢東が文章を筆者に戻し、なにも意見を言わなかっ

た」としている。前掲、『高峡出平湖』四七頁。

または、「周恩来は、水電部が起草した黄河流域の総合開発ビジョンに関する報告を胡喬木に修正させたが、胡喬木は文章が巧みだが水利の専門知識がないので、良い出来ではなかったと語った。その周恩来がはからずも自分の文章を気に入ってくれた」と林一山が回顧している。前掲、『林一山回顧録』一七二頁。林一山は胡喬木らの態度について回顧していないが、このような記述によって自らの名誉を挽回しているようにも思われる。

(37) 李鋭は、毛沢東の秘書田家英と親しく、その職務の大変さを聞かされていたことに加え、水電部門の仕事に愛着があったため、固辞したが、同席の面々に毛沢東の力となるようにと説得された。結局、水電総局長と電力工業部長助理のポストにとどまったまま、毛沢東の通信秘書を兼任することになった。その後、李鋭は五八年八月に水利電力部副部長に抜擢された。同右、『李鋭往事雑憶』二七一～二七二頁。または前掲、『毛沢東年譜』第三巻、二八四頁。

(38) 同右、『李鋭往事雑憶』二八五頁。

(39) 実地調査について次の文献がある。前掲、『李鋭往事雑憶』二七五～二九八頁。『「大躍進」親歴記』一二九～一五六頁。『三峡文史博覧』一四八～一六八頁。『直言』一七一～一九三頁。『李鋭文集』第一〇集「論三峡工程」二三一～二五七頁。本稿では『李鋭往事雑憶』から引用する。

(40) 北京からの参加者に胡耀邦がいたと李鋭が回顧している。同右、『李鋭往事雑憶』二七五頁。

(41) 同右、『李鋭往事雑憶』二一七頁。

(42) 李鋭の発言原稿は下記書籍に所収されている。前掲、李鋭著「一九五八年三月在三峡会議上的発言」『論三峡工程』九四～九九頁。

(43) 前掲、『李鋭往事雑憶』二七七～二七九頁。李鋭はソ連人専門家四人のスピーチ内容を紹介しているが、王任重の日記では、当時発言したソ連人専門家が六人いたとしている。王任重「随周総理考察三峡日記」、前掲、『三峡文史博覧』一四四頁。

(44) 李鎮南著『治江側記』一〇七～一〇八頁、中国水利水電出版社、一九九七年。

(45) 「王任重は、南寧会議で林一山がなじられたことを踏まえ彼を弁護した」。章重著『東湖情深―毛沢東与王任重十三年的交往』一一六頁、中共党史出版社、二〇〇四年。

(46) 前掲、王任重「随周総理考察三峡日記」『三峡文史博覧』一四六頁。同右、『東湖情深』一一六頁。
(47) 前掲、『李鋭往事雑憶』二九〇～二九一頁。
(48) 同右、『李鋭往事雑憶』二八八～二八九頁。
(49) 銭正英「我対長江三峡工程的認識（一九九二年三月）」『銭正英水利文選』二九七頁、中国水利水電出版社、二〇〇〇年。または、「三峡工程的前前後後—銭正英訪談録」『文滙報』一九九二年三月一七日。
(50) 「関於三峡水利枢紐和長江流域規劃的意見（一九五八年三月二五日成都会議通過、四月五日中央政治局会議批准）」『党的文献』一九九七年二月号。次の文献は、「四月一五日、中央政治局がこの報告を批准した」としているが、誤りであると思われる。前掲、『周恩来伝一八九八～一九七六』下巻、一二四九頁。
(51) 曹応旺著『周恩来与治水』四〇頁、中央文献出版社、一九九一年。また前掲、王任重「随周総理考察三峡日記」『三峡文史博覧』一四五頁。前掲、『高峡出平湖』六一頁。しかし、林一山は晩年「聞くところによると、決議全文のほとんどは李鋭が起草した」と述べている。『林一山回顧録』一八三頁。李鋭自身は、「要防止等待三峡工程和有了三峡工程就万事大吉的思想」という文言を付け加えたとしているが、それは、周恩来が重慶で行った総括のなかで述べられたものであるとする文献もある。前掲、『李鋭往事雑憶』二九六頁。『周恩来与治水』四一頁。または、前掲、王任重「随周総理考察三峡日記」『三峡文史博覧』一四六頁。
(52) 「毛沢東対成都会議関於三峡水利枢紐和長江流域規劃意見稿的修改（一九五八年三月）」『党的文献』一九九七年二月号、四六頁。これは公式資料に残った記録である。同時に、李鋭によれば、「水力発電と火力発電、発電と用電（電力販路の確保）」という文言も毛沢東によるものであった。前掲、『李鋭往事雑憶』二九四～二九六頁。
(53) 曹応旺「老一輩革命家与三峡工程」『党的文献』一九九七年二月号、五四頁。
(54) 長江水利委員会編『三峡工程技術研究概論』八一頁、湖北科学技術出版社、一九九七年。
(55) 前掲、『李鋭往事雑憶』二九四頁。
(56) 前掲、『高峡出平湖』六五頁。
(57) 前掲、『治江側記』一〇九、一一〇頁。
(58) 前掲、李鋭著「一九五八年三月在三峡会議上的発言」『論三峡工程』九九頁。

(59) 前掲、「中共湖北省委第一書記王任重同志在長江三峡水利枢紐科学技術会議上的講話（一九五八年六月五日）」。
(60) 前掲、傅秀堂「聴林主任口述歴史」、この発言は「一九九三年五月二九日午後」になされたものである。
(61) 前掲、「長江流域綜合利用規劃要点報告総論（一九五九年七月）」『林一山治水文選』一九一頁。「全国科学技術界争相為三峡服務、三峡水利枢紐科学技術研究会議確定研究課題」『電業技術通訊』一九五八年第七期。
(62) 周培源（北京大学副校長）「修建三峡水庫的国際主義」『人民長江』一九五八年第七期。
(63) 前掲、王任重「中共湖北省委第一書記王任重同志在長江三峡水利枢紐科学技術会議上的講話（一九五八年六月五日）」。
(64) 前掲、『毛沢東年譜』第三巻、三三〇頁。
(65) 前掲、拙稿「一九五四年長江大洪水と三峡ダム計画」。
(66) 前掲、『毛沢東年譜』第三巻、三三四頁。または、曹応旺「老一輩革命家与三峡工程」。
(67) 前掲、『李鋭往事雑憶』二七一頁。
(68) 前掲、拙稿「一九五四年長江大洪水と三峡ダム計画」。
(69) 前掲、『李鋭往事雑憶』二九八頁。